

独立行政法人福祉医療機構（WAM） 社会福祉振興助成事業

平成 22 年度
地域コミュニティによる災害時心のケア事業
報告書

特定非営利活動法人
埼玉カウンセリングセンター

はじめに

当団体が、災害ボランティアに関する活動に取り組み始めたのは、平成 20 年のことです。日頃から地域において、独り暮らしの方の見守り活動などをされている人々とともに、「傾聴」「コミュニケーション」「ストレス・マネジメント」「危機支援」について学び合う活動を始めてから、数年がたっていました。一方、関東地域における大地震の不安も高まり、地域における支え合い活動にも関心が高まっていました。

そこで、ボランティアで傾聴活動を行っている人たちに、災害時においても中心となって、見守り活動とこころのケアに携わってもらえたら、平時の活動もさらに目的がはっきりするのではないかと考えました。

また、日本カウンセリング学会認定カウンセラー会の危機支援部会との連携もあり、有資格者によるボランティアに対するサポート体制を確立したいと取り組んだのが、埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS) です。

今年度実施した「地域コミュニティによる災害時心のケア事業」は、ボランティアと有資格者の人材育成および体制の強化、そして、災害時にこころのケアに携わることができる人々のコミュニティづくりです。

実際に災害が起きた場合、平成 20 年度に取り組み始めたこのシステムが、効果的に力を発揮できるのかを考えてみると、まだまだ個人の活動に頼らざるを得ない状況にあり、厚みのあるしかも長続きする災害支援の実現には、検討すべき点が多く残されています。支援者のコミュニティづくりは、災害時のこころのケアの拠点づくりを目指すものであり、埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS) を、災害時に備え平常時から機能する「こころのケアに対する支援体制」として確立することを目的としています。

災害時を想定したこころのケアに関する研究は、不安の多い現代社会における心身の健康維持・増進のためにも、大いに役立つものです。日常から傾聴・見守り活動などの実践を行いながら、こころのケアに関する取り組みについて検討し合う人々のコミュニティが、さらに広がることを望んでいます。

平成 23 年 3 月

特定非営利活動法人埼玉カウンセリングセンター
代表理事 高倉 恵子

この原稿を印刷にまわす 2 時間前に、東北太平洋沖大地震が起きました。予想をはるかに超えた大震災。実際に活動することになってしまったことが残念でなりません。

亡くなられた方のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

も く じ

第1章 前回の報告書で提案した支援モデル (SMSS)	
1) 埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS)	4
2) メンタルサポーター	5
3) 専門家チーム	6
4) メンタルサポート活動の3点セット	7
第2章 研修会実施報告 ～支援の輪を広げるために～	
1) メンタルサポーター養成講座	9
2) 連絡協議会・フォローアップ講座	10
3) さいたま防災ひろば 2010 への参加	12
4) 日本カウンセリング学会第43回大会自主シンポジウム	13
第3章 成果と課題	
<成果>	
1) 専門家チームおよび、メンタルサポーターの養成講座の開催	16
2) 専門家チームおよび、メンタルサポーターのためのスキルアップ研修の実施	16
3) 専門家チームおよび、メンタルサポーターのコミュニティ成熟の支援	17
4) 県民・市民に向けて防災意識を高める啓蒙活動	17
5) 他のNPO団体とのネットワーク作り	17
<課題>	
1) 人材育成の必要性・更なるメンタルサポートの研修の充実	18
2) より実効的な災害時システムの構築	18
3) 災害時の活動拠点となるセンターの設立	19
第4章 本部的役割を持つ『埼玉こころのケアセンター』の設置	
1) 災害ボランティア情報の共有、および支援体制の確立の必要性	20
2) 『埼玉こころのケアセンター』設置の経過と活動内容	21
3) 平常時におけるこころのケアに携わる人のコミュニティづくりと、災害危機時における拠点となる『埼玉こころのケアセンター』のマニュアルづくり	23
【資料1】メンタルサポーター養成講座講義資料 (P.P.資料)	
【資料2】メンタルサポーター養成講座およびフォローアップ講座、参加者アンケート	24
【資料3】各講座に対するアンケート集計結果	29

第1章 前回の報告書で提案した支援モデル (SMSS)

1) 埼玉メンタル・サポート・システム

特定非営利活動法人埼玉カウンセリングセンター (Saitama Counseling Center: SCC) は、埼玉県における独居高齢者・障がい者に対する災害時のこころのケアのあり方を研究し、2008年に「埼玉メンタル・サポート・システム (Saitama Mental Support System : SMSS)」を考案した (図1 参照)。

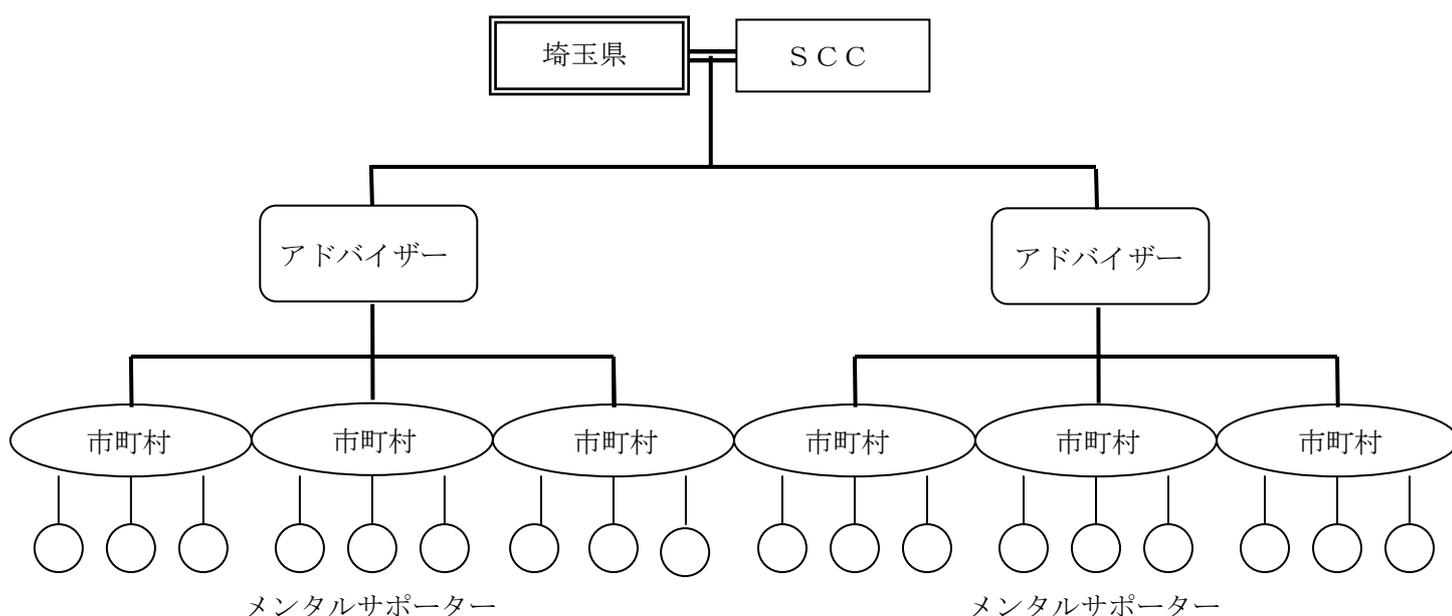


図1 埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS) の全体図

「埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS)」とは、埼玉県における独居高齢者・障がい者に対する災害時の心のケアのシステムのことである。このシステムは、被災者に直接関わって傾聴や心身の健康度の見立てなどを行う「メンタルサポーター」とそのメンタルサポーターをスーパーバイズしたり、二次災害の予防を行ったり、専門機関との連携などを行う「専門家チーム」の2つの階層からなる (図2 参照)。

「メンタルサポーター」と「専門家チーム」とでは活動領域が異なる。「メンタルサポーター」は地域のボランティアが担当するので市町村レベルの活動であり、「専門家チーム」は、埼玉県全域の「メンタルサポーター」が支援対象なので、都道府県レベルの活動である (図1 参照)。

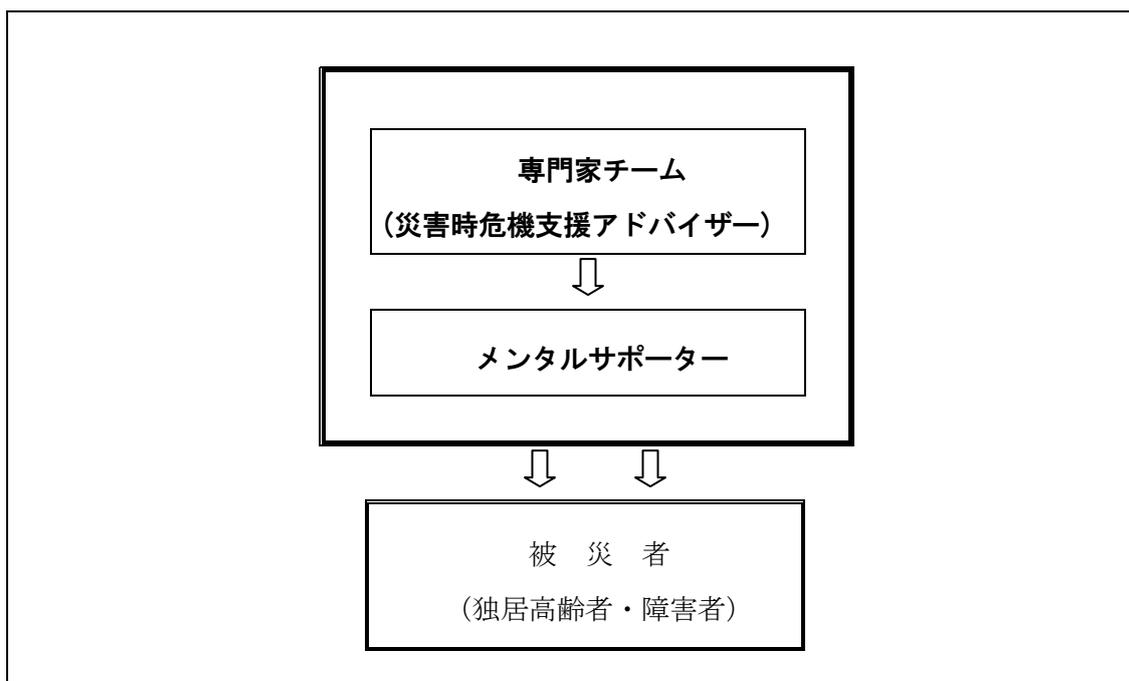


図2 埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS) の二層式支援モデル

2) メンタルサポーター

「メンタルサポーター」とは、「災害時の心理」「傾聴訓練」「ストレス・マネジメント」「高齢者・障がい者の支援」などの研修を受け、災害時には、積極的にこころのケアに対する活動をする人たちのことである。また「メンタルサポーター」は、日ごろから高齢者・障がい者に対して、地域で自主的に支援活動を行う。

災害時の「メンタルサポーター」による心のケアは、傾聴活動と同時に、身体面や心理的な状態の把握をしたり、被援助者が深刻な問題を抱えている場合には「専門家チーム」につないだりすることも期待されている。

表1 メンタルサポーターの役割

<p>(平常時) 高齢者・障がい者に対して、地域で自主的に支援活動</p> <p>(災害時) 傾聴活動 / 身体面や心理的な状態の把握 / 専門家チームヘリファアー</p>
--

「メンタルサポーター」は、すでに傾聴ボランティア養成講座を修了した人、地域で活動している民生委員、災害時メンタルサポーター養成講座を修了した人などが担当する。

傾聴ボランティア養成講座は数年前から（特）埼玉カウンセリングセンターで実施しているものである（修了者約 600 名）。

災害時メンタルサポーター養成講座は、「災害時の心理」「傾聴訓練」「ストレス・マネジメント」「高齢者・障がい者の支援」の4つの領域からなり、専門家ではない人々が災害時

に高齢者・障がい者に対して心のケアを行うのに最低限必要な知識・技術などについての講義・演習となっている（修了者 98名）。この講座は本事業を推進するに当たり埼玉カウンセリングセンターが考案したものである。

災害時に「メンタルサポーター」として活動する人は、「メンタルサポーター」登録をされている人（現在 71 名）の中で被災地域に近接する市町村に在住の人たちで構成される。

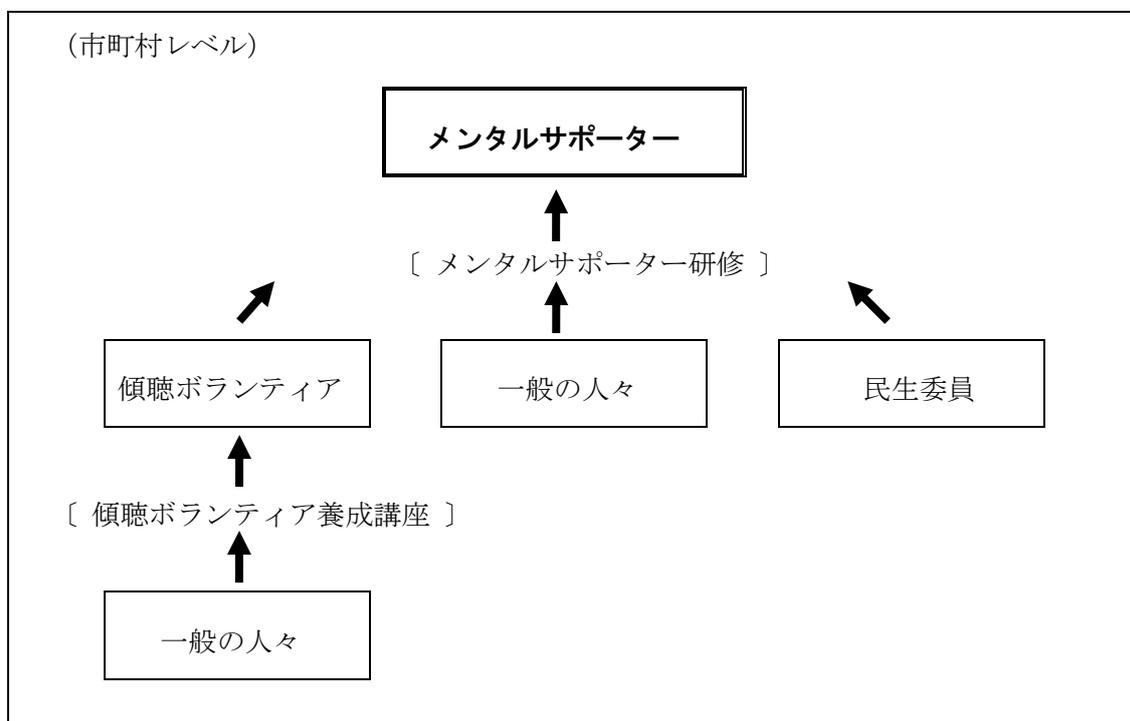


図3 メンタルサポーター

3) 専門家チーム

「専門家チーム」とは、「メンタルサポーター」をスーパーバイズしたり、二次災害の予防を行ったり、専門機関との連携などを行う人たちのことである。

表2 専門家チームの役割

(平常時) メンタルサポーター研修
(災害時) メンタルサポーターのスーパーバイズ／二次災害の予防／専門機関との連携

「専門家チーム」は、日本カウンセリング学会認定カウンセラー危機介入部会埼玉県支部に所属するメンバーや市町村社会福祉協議会ボランティアコーディネーターの中で、「専門家チーム研修」を修了し「災害時危機支援アドバイザー」登録した人により組織される（現在 15 名）。「災害時危機支援アドバイザー」は、埼玉県全域の「メンタルサポーター」

の活動を支援する。

「専門家チーム研修」は、「危機支援のあり方」「サイコロジカル・ファースト・エイド」「ストレス・マネジメント教育」など、専門家として災害時に心のケアを行うのに必要な知識・技術についての講義・演習などで構成されている。この研修プログラムは、立正大学准教授小澤康司先生が考案したものである。

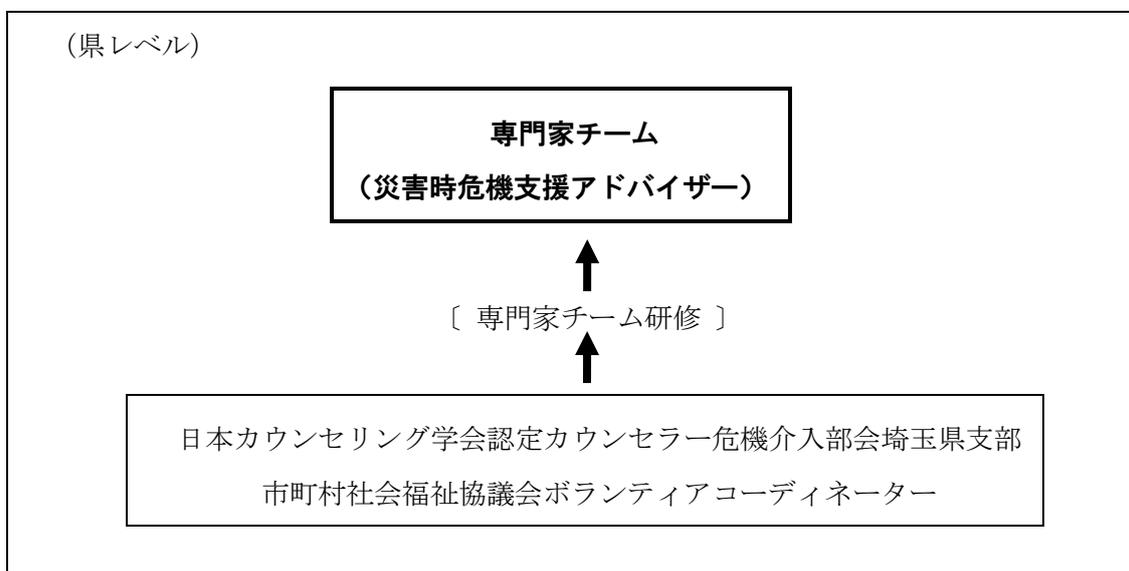


図4 専門家チーム

4) メンタルサポート活動の3点セット

「埼玉メンタル・サポート・システム (SMSS)」は、実際の災害時のメンタルサポート活動をスムーズにするため、災害時メンタルサポーター養成講座修了者には、災害時に「メンタルサポーター」として活動時に身につける3点セットを配布している。3点セットとは、「腕章」「修了証」「メンタルサポーター・ハンドブック」である。

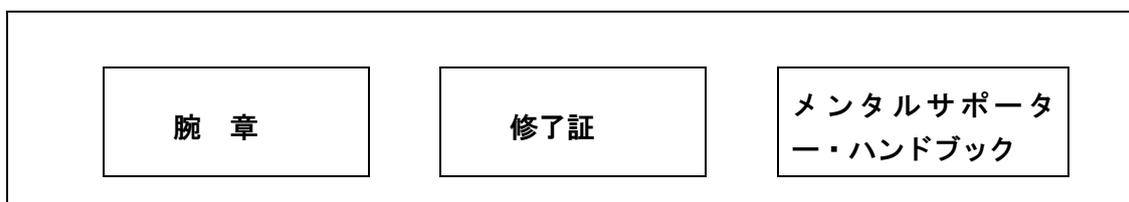


図5 メンタルサポート活動の3点セット

「腕章」は、メンタルサポーターであることを他者に知らせるもので、災害時に活動するときに装着する。この腕章は、腕章の中に「修了証」と「メンタルサポーター・ハンドブック」が挿入できる構造となっている。

「修了証」は災害時メンタルサポーター養成講座を修了したことを証明するもので、名刺サイズのカードである。

「メンタルサポーター・ハンドブック」は、災害時メンタルサポーター養成講座の内容を要約した小冊子で、活動中に研修内容を確認したいと思ったときにいつでも参照することができるようにコンパクトなサイズとなっている。

2008年に考案した SMSS は、システムを構築する際、従来の災害時の心のケアの問題点（短期的・集中的・外部的・非組織的）を改善するように努め、こころのケアを「長期的・継続的・内部的・組織的」に実施できるシステムとなっている。

しかし、2008年以降の様々な調査研究活動を通して、災害時に SMSS が有機的に機能するためには、専門家チーム・メンタルサポーターのスキルアップとコミュニティのさらなる成熟が必要であると思われた。

本研究では、(1) 専門家チーム・メンタルサポーターのスキルアップ、(2) 専門家チーム・メンタルサポーターのコミュニティのさらなる成熟の点について考察したい。また、実際の災害時支援活動に向けての課題提起と、次なる事業の提案をしたい。

第2章 研修会実施報告 ～支援の輪を広げるために～

本事業を進めていくためには、地域ごとに配置されるメンタルサポーターの活動力を最大限に引き出して行かなくてはならない。いつ起こるのか分からないのが災害であるため、備えを怠らないためにも定期的な研修会は重要な意味があると思われる。平成20年度はメンタルサポーター養成講座と災害危機支援アドバイザー研修会を行ったが、参加者の研修への意欲は高く、平成22年度行った研修会も、フォローアップ研修会は特に参加者が積極的であった。

1) メンタルサポーター養成講座

①さいたま会場

期 日：平成22年10月7・14・21・28・11月4日（木）

会 場：浦和ふれあい館

内 容：「阪神・淡路大震災に学ぶ」「災害時のこころのケア」「傾聴演習」「ストレス・マネジメント」「要援護者への支援」「防災マップ・支え合いマップ」「実際の活動に向けて」

参加人数：31名

②川越会場

期 日：平成22年11月1・8・15・22・29日（月）

会 場：総合福祉センター オアシス

内 容：①と同様

参加人数：24名



メンタルサポーター養成講座（さいたま会場）
防災マップづくり



メンタルサポーター養成講座（川越会場）
足湯体験

2) 連絡協議会、フォローアップ研修会

①期 日：8月21日(土)

会場：埼玉県県民活動総合センター

内容：情報交換、地域での見守り活動の実際

参加人数：21名

災害危機支援アドバイザー及びメンタルサポーター連絡会議(埼玉県民活動総合センター)を実施した。対象者は、(特)埼玉カウンセリングセンターが実施した過去の研修会参加者である。テーマは、1 災害危機支援に関する情報交換、2 災害時に備えた今後の取り組みと体制作り、であった。民生委員による見守り活動の報告は、地域差の大きい活動のため、実際に成功している例は「地域とどう関わっていくか」という点で、参加者には大変参考になった。

また同日行われた、(特)NPO 埼玉ネットの企画による「災害時における応急対応、復旧・復興の取り組み」(同所)のセミナーに、当 NPO も法人参加した。対象者は、災害危機支援に関するボランティア活動に関心のある人および一般の人である。第一部は長島忠美衆議院議員(全国災害ボランティア議員連盟会長、旧山古志村村長)による講演であった。第二部は、松尾道夫(新しい公共をつくる市民キャビネット災害支援部会長)をコーディネーターとして、村井雅清(被災地 NGO 協働センター代表)、江口タミ子(全日本救助犬団体協議会、日本搜索救助犬協会代表理事)、富山晶(埼玉県危機管理防災部消防防災課、地震対策担当主幹)及び長島忠美衆議院議員によるパネルディスカッションが実施された。

なお、来賓として五十嵐文彦衆議院議員が参加した。

②期 日：10月30日(土)

会場：With You さいたま 男女共同参画推進センター

内容：情報交換、ストレス・マネジメント

参加人数：24名

情報交換会では、現在傾聴に関するボランティア活動をしている人たちが、日ごろの活動で困っていること、疑問に思っていることなどを意見交換した。1 無口な人との会話のしかた 2 複数の人との会話のしかた 3 施設側との連携のしかた 4 傾聴以外の活動との関わり方 5 グループ継続の課題などが出され、他の地域の実例を聞ける良い機会となった。

また、ストレス・マネジメントはリラクゼーションの体験を行った。「実際に使えるようになるには、時々体験する必要がある」という意見が聞かれた。

③期 日：2月5日(土)

会場：With You さいたま 男女共同参画推進センター

内容：情報交換、HUG(避難所運営ゲーム)

参加人数：29名

平成 23 年 2 月 5 日。With You さいたまにて、メンタルサポーターおよび災害危機支援アドバイザーを対象とした「連絡協議会・フォローアップ研修会」を開催した。当日参加した災害危機支援アドバイザーは、日本カウンセリング学会の認定カウンセラーから 5 名である。いずれもベテラン揃いの頼もしい顔ぶれで、意欲にあふれていた。災害危機支援アドバイザーは、災害時にはメンタルサポーターを支える役割を担うことになり、この研修会は 2009 年 1 月に行われた災害時危機支援アドバイザー研修会の、フォローアップ研修会との位置づけでもあった。



連絡協議会は、埼玉カウンセリングセンター代表理事、高倉恵子の挨拶から始まった。今年度の本事業の流れ、次いで市民キャビネット・災害支援部会の活動報告の後「今後もこのような情報交換会を年に 1 回は実施したい」と、次年度への抱負を述べた。

その後、各担当地域に分かれて、自己紹介と情報交換を行った。ここでは活発な話し合いが行われた。

この日のフォローアップ研修は「避難所運営ゲーム(HUG)」であった。HUG とは H(避難所 Hinanjo)、U(運営 Unei)、G(ゲーム Game)の頭文字を取ったもので英語の HUG(抱きしめる)の意味も兼ねているとのこと。このゲームは避難所の運営を皆で考えるために静岡県により開発されたものである。



避難者の年齢や性別、国籍、それぞれが抱える事情が書かれた数多くのカードが配られ、避難所の体育館や教室に見立てられた平面図にそれらのカードをどれだけ適切に配置できるかを考える。

また避難所で起こる様々な出来事にどのように対処していくかを模擬体験するゲームである。



実際の避難所さながらであった。

参加者のほとんどが「どのようなことが避難所で実際に起こるのか、模擬的にでも体験できたことは大変有意義だった」と感想を述べていた。

3) さいたま防災ひろば 2010 への参加

期 日：11月13日（土）
会 場：武蔵浦和ラムザタワー
内 容：足湯体験



開会式の様子

この日、(特) 埼玉カウンセリングセンターは「足湯体験会」を主催した。

足湯は災害で疲れた被災者のこころを癒すのに、大変効果があると言われている。阪神・淡路大震災から、新潟中越大震災へと受け継がれ、もっとも最近では新燃岳噴火の避難所でも、足湯部隊が活躍している。

参加者は、担当する予定の地域ごとでグループに分かれて体験した。

まず、グループのひとりが次々にカードに書かれた内容を読み上げていく。まるで実際の避難所に被災者がやってくるかの様に、次から次へとカードが読み上げられていく。

グループのメンバーはカードに書かれた内容や指示に大変な混乱状態になり、ディスカッションが絶え間なく繰り返される様子は、



多くの参加者が、実際に足湯を体験した。

「足が温まると、心も温まります」「実際の災害の時に、足湯で皆の心がほっと一息つけるといいですね」などの感想が聞かれた。

メンタルサポーターにとっても、実際に一般の方を対象とした足湯の実施は、災害時に活用するためにも必要な体験である。

4) 日本カウンセリング学会での研究発表

期日：9月4日（土）

会場：文教大学 越谷校舎

内容：日本カウンセリング学会第43回大会自主シンポジウム

「認定カウンセラーの社会貢献を考える

—認定カウンセラー資格を仕事、地域で活かす—

災害危機支援アドバイザーによる話題提供。主旨は以下の通りである。

司会者	関口 幸男	東京国際大学 講師
話題提供者	伊志嶺 廣	(株)ライトマネジメントジャパン キャリア・コンサルタント
	小沼 規子	東京都北区スクールカウンセラー
	松舘 千枝	ふじみ野市 民生・児童委員
指定討論者	高倉 恵子	特定非営利活動法人埼玉カウンセリングセンター 代表理事



<企画趣旨>

実際に仕事の間を開拓して来た3名から、社会的課題、カウンセラーに求められているもの、独自性等について、話題提供をする。

また、コミュニティへの積極的参加の可能性について、フロアも交えてディスカッションを行いたい。(特)埼玉カウンセリングセンターが取り組んでいる「災害時こころのケアシステム(SMSS)」は、埼玉県内の認定カウンセラーから希望者を募り、地域で活動する傾聴ボランティア等をサポートする事業である。話題提供者はそのメンバーでもある。

仕事と地域貢献の2つの視点から、認定カウンセラーの将来性について考えていきたい。

<話題提供>

■キャリア・カウンセリングの領域から 伊志嶺廣

私は、米国系再就職支援会社にてキャリア・カウンセリングの仕事に従事しています。対象クライアントは、企業の再編、M&A、生産拠点・研究所の移転・閉鎖、日本法人の撤退、営業譲渡等のリストラクチャリングにより離職を余儀なくされた20～60歳代の社会人です。その目的は、「仕事を通じてやりがい、生きがいを感じる人生創りへの移行支援」です。人生設計の主人公であるクライアントのゴールに向けて、黒子的伴走者として、一緒に考えていくプロセスともいえましょう。

地域活動としては、NPO埼玉カウンセリング研究会の役員としてボランティア的に参画しています。様々な領域で活動をされている会員向けに、カウンセリング力の向上を目指し、著名な先生による研修講座の企画・立案を行っています。

■スクール・カウンセリングの領域から 小沼規子

認定カウンセラーの資格を取り、7年目を迎え、本年が書き換えの年に当たります。ステップアップにと入学した夜間社会人大学院で勧められ、資格を取得しました。ただ資格取得が仕事場に結び付かず、友人の紹介で現在の仕事につきました。

小学校のスクールカウンセラーとして働き始めて5年目を迎えています。スクールカウンセラーの役割は「一人ひとりの子どもが学校生活を通して出会う問題の解決を援助する心理教育的サービスである」と学校心理学で学び、私自身心掛けています。

仕事は、保護者からの相談や担任へのコンサルテーションを行うことが多く、最近発達障害や発達に偏りがある児童に関する相談や支援の検討が増えています。社会貢献とは言えませんが、問題を抱える児童を少しでも支えられればと、日々思っています。

■福祉・コミュニティ支援の領域から 松館 千枝

退職して地域に腰を据えてみると、住民目線の問題点が沢山見えて来た。身近な相談者として、来談者を待つのではなく自分から出かけていって支援の必要な方の声を聴く事の大切さを実感しています。その強力な媒体となってくれるのが、民生・児童委員という役割でした。地域住民が安心して生活できるための“予防的開発的カウンセリング”として認定カウンセラーの役割を果たしていきたいと思います。幸い、長年の医療関係者であったこと、認定カウンセラーであったことが、心と体の両面からのサポートが可能となり、私の強みとなっています。同じ場の生活者として、社会貢献していきたいと思います。

<指定討論>

■地域に根差し、連携して活動できるカウンセラーのコミュニティ 高倉 恵子

「個」から「集団」へ

「単独」から「連携」「協働」へ

「待つ」から「出かける」へ

「部屋」から「現場」へ

予防的・開発的カウンセリングが叫ばれて久しいが、やはりこころのケアについては、いまだ専門家による閉ざされた空間で考えられることがほとんどである。非常に繊細な対応を求められるものであるし、守秘義務のもとで初めて成り立つ世界でもある。

しかし、社会復帰のためにはいずれ、カウンセラー以外の人にも心を開いていかなければならない時期が来る。人は人によって傷つきもするが、また回復するためにも、人とのつながりが不可欠である。

平成20年に「災害危機に対応する独居高齢者・障がい者支援事業」に取り組んだのは、社会全体がこころのケアについて、日常から関心を持てるようになることを願ってのことである。そして今年度は、こころのケアに積極的に関われる人のコミュニティづくりを目的に、「地域コミュニティによる災害時心のケア事業」を展開している。

平成20年に考案した「埼玉メンタル・サポート・システム（SMSS）」は、こころのケアに携わるボランティアと有資格者によるコミュニティの、骨組みである。様々な人と連携し、社会貢献できるカウンセラーとともに、こころのケアにおけるひとつの活動領域を構築していきたい。

<まとめ>

(特) 埼玉カウンセリングセンターによる、日本カウンセリング学会における例年の発表および自主シンポジウムに関して、今後とも息の長い取り組みが求められる。今回の自主シンポジウムに限っても、現在、認定カウンセラーの活動領域は多岐に渡っており、その実力を発揮しうる場の形成が求められる。それは、認定カウンセラーの実力向上が大前提となる。

第3章 成果と課題

<成果>

第1章で述べた通り、前年度の研究において、我々は埼玉メンタル・サポート・システム（以下 SMSS と記す）の構想を示した。本年度はその構想の具体化・実現化に向けて以下のような3つの活動を行った。即ち、

- 1) 専門家チームおよび、メンタルサポーターの養成講座の開催
- 2) 専門家チームおよび、メンタルサポーターのためのスキルアップ研修の実施
- 3) 専門家チームおよび、メンタルサポーターのコミュニティ成熟の支援
- 4) 県民・市民に向けて防災意識を高める啓蒙活動
- 5) 他のNPO団体とのネットワーク作り

である。各活動については、以下のような効果があげられたと考えている。

1) 専門家チームおよび、メンタルサポーターの養成講座の開催

前年から引き続き、今年はさいたま市と川越市で、メンタルサポーター養成講座を開講し、阪神・淡路大震災の事例から、災害時のこころのケアの重要性や、要援護者への支援のあり方などを理論的に学んだ。また、メンタルサポーターが、災害時にどのような活動を行い、役割を担うのかについての理解を促し、メンタルサポーターとして登録するメンバーを募った。結果、今年度は47名の登録があった。

2) 専門家チームおよび、メンタルサポーターのためのスキルアップ研修の実施

これまで「メンタルサポーター養成講座」や、「災害時危機支援アドバイザー研修会」を受講し、登録したメンバーを対象に、今年は、これまでに学習した内容を、さらに実際の災害時の活動にどのように活かし、援助するかについての、援助実習・演習を中心としたスキルアップ研修を行った。

災害時に実際に被災者の中で活動するメンタルサポーターには、まず、災害時の様子ができるだけ具体的にイメージしながら研修を受ける必要がある。今年度の研修では、静岡県で開発された“避難所運営ゲーム（HUG）”を用い、被災した人々には様々な立場やハンデを持つ人がいることを実感し、被災者の心の状態などを具体的にイメージしながら、適切な指示と対応についてグループで検討した。特に即時の判断が求められる被災状況のイメージ化と、的確な判断と支援者同士の連携の必要性、高齢者や障害者への情報伝達の留意点などを具体的に学習することができた。

また、“ストレス・マネジメント”と題し、支援者としてのメンタルサポーター自身のこころのケアの重要性と、実際のマネジメント方法についての演習を行った。

さいたま防災ひろばへの参加では、災害時の援助実習として、訪れた一般の県民・市民を対象に、メンタルサポーターが足湯の体験実習を行い、援助者としての被災者への声の

かけ方についての学びや、「メンタルサポート」という支援のあり方の意義と具体的な活動イメージを持ってもらうことができた。

実習、演習を通して、より具体的な災害時の被災者支援活動をイメージさせることで、メンタルサポーターの育成に寄与できたと考えている。

また、被災時に活動するボランティアに対する、被災者のこころのケアの研修や、有効な学習のあり方について、研究されているものは少ない。今後の研修のあり方の1つのモデルを示すことができたと考えている。

3) 専門家チームおよび、メンタルサポーターのコミュニティ成熟の支援

実際に被災地域で活動するに当たり、メンタルサポーターは専門家チームと協働して支援にあたることとなる。また、地域の他団体（自治体や他ボランティア組織等）とのつながりも不可欠である。

それぞれの地域性や、行政システムや存在する団体・組織など地域によっても大きく異なり、メンタルサポーターの活動は一律同じという訳にはいかない。そのため、専門家チームのメンバーとの顔合わせや、それぞれの地域に最適な活動のあり方を探り、他地域の活動を参考にする、情報交換の機会が必要である。

そこで今年度は、メンタルサポーターのスキルアップ研修会で、他地域のメンタルサポーターとのつながりを持つ機会をつくとともに、専門家チーム（有資格者の災害危機支援アドバイザー）を交えた情報交換会による縦のつながりの強化を行った。

4) 県民・市民に向けて防災意識を高める啓蒙活動

災害時に活動する SMSS の存在を県民・市民の方に広く知っていただくこと、また、災害時にどのようなことが起こるのか、被災者となった時に何が困難となり、家族や周囲の人に自身がどのような援助が出来るのかなど、日頃から防災に対する知識と意識を高めていただくことが重要であると考えている。

今年度は、東京ガスが主催する「さいたま防災ひろば 2010」のイベントに参加し、神戸の震災の記録ビデオの上映と、SMSS の取り組みについてポスター発表、実際にメンタルサポーターが災害時に被災者に対して行う、足湯体験などの催しを行い、県民・市民に対する SMSS の活動と防災知識についての周知活動を行った。

5) 他のNPO団体とのネットワーク作り

SMSS は災害時の被災者のメンタルサポートに主眼をおいているが、実際の災害時には他の団体と協働して活動にあたることが想定される。また、より災害時に即時対応できる実効的な組織であるためには、他団体と連携しながら、人材を育成していく必要があると考えられる。

今年度は、市民キャビネットに参加し、他のNPO団体の主催するメンタルヘルスやこころのケア・支援活動に関する研修講座を講師として担当した。講座の中で、災害時のメ

ンタルヘルスについて、メンタルサポートの活用、SMSSの活動などについての説明を行い、他団体とのネットワーク作りの基礎を作った。今後さらにこのネットワークを強化していくことにより、他団体との連携の中で、災害時に活動する人材の育成において、SMSSが担う役割が明確になっていくと思われる。

<課題>

上述の通り、今年度、SMSSの目指すシステム構築を具体化・実現化するために活動を行った中で、以下のような課題が明らかになってきた。即ち、

- 1) 人材育成の必要性、更なるメンタルサポートの研修の充実
- 2) より実効的な災害時システムの構築
- 3) 災害時の活動拠点となるセンターの設立

である。

1) 人材育成の必要性、更なるメンタルサポートの研修の充実

災害時の支援活動に必要な、知識と実践力を備えたボランティアの育成は急務である。実際の災害時を想定した訓練や、メンタルサポートの実際、連携や情報共有のあり方、メンタルヘルスに関する知識、サポーター自身の心のケアなど、学ばなければならない内容も多い。研修の充実が求められる。

2) より実効的な災害時システムの構築

2008年に考案されたSMSSは、従来の災害時の心のケアの問題点（短期的・集中的・外部的・非組織的）を改善するように努め、心のケアを「長期的・継続的・内部的・組織的」に実施できるシステムを目指している。

実際に被災地域で活動するに当たり、メンタルサポーターは専門家チームと協働して支援にあたることとなるが、長期的・継続的・組織的な支援を行うに当たっては地域の他団体（自治体や他ボランティア組織等）とのつながりも不可欠である。

先に述べたように、被災地の地域性や、行政システムや存在する団体・組織など地域によっても大きく異なり、メンタルサポーターの活動は一律同じという訳にはいかない。そのため、災害時にSMSSが有機的に機能するためには、専門家チーム・メンタルサポーターのコミュニティのさらなる成熟と、それぞれの地域に最適な活動のあり方を探る必要があると思われる。また、災害時に動く他の団体との協働・連携を行うためにも、埼玉県全体の中でのSMSSの位置づけを明確にし、求められている役割に即した研修を行っていくべきであると考えている。

3) 災害時の活動拠点となる、本部的役割を持つセンターの設立

実際、災害が起きたときに、ボランティアがいつから活動し、どこに集まり、何から始め、どのように活動するのか。誰と連絡をとり、どのように情報の共有と連携をはかるのか。災害時にこれらの疑問に答え、活動を支える拠点となり、本部的役割を持つセンターの設立が必要ではないかと考えられる。

災害時により実効的であるシステムの構築と、その中心となるセンターのあり方について、第4章で考察したい。

第4章 本部的役割を持つ『埼玉こころのケアセンター』の設置

1) 災害ボランティア情報の共有、および支援体制の確立の必要性

①県レベルの支援体制づくり

地域で見守り活動やお話し相手ボランティアを行っている人々は、各社会福祉協議会や地域包括支援センター等とのつながりをもちながら、グループで活動を行っている。

グループの成り立ちは、社会福祉協議会等主催の傾聴ボランティア養成講座で一緒に学んだ人々が集まってできる場合もあれば、イベント等の施設訪問がきっかけでお話し相手グループをつくる場合、またはサロン活動をしていたグループが傾聴に力を入れる場合もある。

また活動内容も、イベントへのお誘い、デイケア施設でのお手伝い、グループホームでのお話し相手、独り暮らしの方の居宅訪問、電話による安否確認など様々である。さらに、それぞれの地域性や、行政および施設の事情にも差があり、縦にも横にも関係が取りにくい状況から、活動しているグループは多くの悩みを抱えている。そのような中で聞かれた声は、他グループとの情報交換の機会と、実践に活かせるフォローアップ研修会実施の要望であった。

さらに、災害危機に対応できるこころのケア活動を目的に置いた場合は、地域による被災状況に差はあるものの、県レベルの対応がさらに必要となってくる。そこで、広域情報の共有化と支援体制の確立が求められる。

②縦と横の組織づくり

今年度取り組んだ「地域コミュニティによる災害時心のケア事業」は、予想される大地震の際に、実際に機能することができるよう、災害危機時におけるこころのケア活動に携わる人のつながりの強化と、その本部的役割を（特）埼玉カウンセリングセンターが担うことを目指した。つまり、埼玉メンタル・サポート・システム（SMSS）の強化と、災害時に備えた平常時からの活動である。

具体的には、ボランティアで活動するメンタルサポーター（平成 22 年度登録者を含め 118 名）を対象としたフォローアップ研修会を実施し、「横のつながり」を持つ機会をつくるとともに、有資格者の災害危機支援アドバイザー（平成 22 年度登録者を含め 20 名）を交えた情報交換会による「縦のつながり」の強化を行った。

（特）埼玉カウンセリングセンターは、青少年および一般社会人の心身の健康維持・増進に寄与することを目的に、相談活動、研修・研究活動、啓発活動、他機関との連携を主な事業としている団体である。

そこで、日常行っている事業の専門性を活かし、災害時にはこころのケアに対する支援活動を県レベルで展開できるよう、本部的役割を担う非常時組織『埼玉こころのケアセンター』の設置を検討した。

③他団体との連携

当団体は、『新しい公共をつくる市民キャビネット』の災害支援部会に所属している。

この災害支援部会では、協働型災害ボランティアセンターを全国数か所に設置することを目標にしており、埼玉県もその候補に挙がっている。当団体は、「基金訓練」において、平成 22 年度は NPO 地域コーディネーター養成科の「コミュニケーション能力向上講座」を担当しているが、NPO 災害支援コーディネーター養成科の企画も進んでいる。

災害危機時において、様々な立場の NPO 団体がそれぞれの得意分野を活かし、チームワークを組んで支援活動を行う形ができつつある。この組織においても、こころのケアを担当する専門家チームとボランティアのコミュニティとして、当団体が進めている埼玉メンタル・サポート・システム（SMSS）への期待が高まっている。

『新しい公共をつくる市民キャビネット』は、1月27日に設立1周年を迎え、災害支援部会は、「災害支援基金と災害支援人材研修センターの設立」を政策として提言した。

2) 『埼玉こころのケアセンター』設置の経過と活動内容

①災害時急性期の活動

災害発生より 72 時間は、まずそれぞれの身近な地域での安否確認および生命の安全確保が必要である。この間に（特）埼玉カウンセリングセンターの役員は『埼玉こころのケアセンター』を設置し、情報の収集と発信の準備を行う。

ア 情報の収集と発信

埼玉県および近県の被害状況の確認と情報の整理。メンタルサポーターと災害危機支援アドバイザーへの情報発信は、現在のところ災害伝言ダイヤルを考えている。災害時急性期の情報発信については課題が多く、協働型災害ボランティアセンターが設立された場合は、コミュニティ放送局の利用を検討している。しかし、まだ体制が整っていない現在、通信システムが復旧するまでは、『埼玉こころのケアセンター』を情報の拠点とし、可能な移動手段を利用した情報の収集と発信になると思われる。

イ メンタルサポーターによる支援活動

地震発生から 2～3 か月、長い場合半年間は、避難所におけるこころのケア活動になる。メンタルサポーターは、各地域でそれぞれがこころのケア活動を行いながら、物資の運搬など生活環境の調整に携わる。具体的には、体調および避難所生活の状況の聞き取り、お話し相手、足湯などのリラクゼーション、要援護者への情報提供など。心身の健康に心配のある人がいる場合は、『埼玉こころのケアセンター』または地域の災害危機支援アドバイザーに連絡をする。

ウ 災害危機支援アドバイザーによる支援活動

地震発生後、移動可能な災害危機支援アドバイザーは、『埼玉こころのケアセンター』に集合し、支援体制を検討する。各地域の被害状況を整理し、メンタルサポーターに伝える支援活動に対するアドバイスをまとめる。一方、災害危機支援アドバイザーによる支援を必要とする状況が起こっていないかを確認するための、聞き取り調査の準備を行う。

地震発生後数週間頃までに、移動可能な災害危機支援アドバイザーが『埼玉こころのケアセンター』において、それぞれの地域の被害状況の確認と、避難所での課題および必要なこころのケア活動について検討する。通信手段が復旧した場合は、随時連絡を取り合う。被災者が多い地域から、避難所生活に対する聞き取り調査を行う。

エ 他団体との連携

『新しい公共をつくる市民キャビネット』の災害支援部会に所属している埼玉県内の団体と、情報の共有を行う。中間支援組織である（特）NPO 埼玉ネットと連携し、市民防災ヘリコプターチーム、キャンパー（2週間のメニューによる炊き出し）、日本搜索救助犬協会などからの情報を元に、被災地の状況を確認し、SMSSによる支援体制を検討する。

日本カウンセリング学会認定カウンセラー会災害危機支援部会と連携し、こころのケア活動に関する助言をもらうとともに、県外の災害危機支援アドバイザーの派遣を要請する。

②長期化した場合の活動

ア メンタルサポーターによる支援活動

地震発生から数カ月がたち、仮設住宅などの生活になってからは、訪問による見守り活動、お話し相手、情報の提供が主な活動になる。また、心身の健康観察が重要になり、特に身体に関する健康に関しては独自の判断は避け、保健師、ケアマネージャーなどとの連携が必要である。『埼玉こころのケアセンター』においては、情報交換、事例検討を行う機会を設け、メンタルサポーターを援助する。

イ 災害危機支援アドバイザーによる支援活動

埼玉県内の被災生活を調査し、こころのケアに関する支援を検討する。メンタルサポーターには、支援活動に対してアドバイスを行うとともに、メンタルサポーター自身のこころの健康維持にも対応する。

また、ストレスからくる体調不良や精神的不安定状態、PTSD（心的外傷）などに対応できるよう、青少年および一般社会人（特に児童と高齢者）に対する調査を行い、県

レベルの心身の健康管理に取り組む。また、調査と心理療法を行う場合は、日本カウンセリング学会認定カウンセラー会および臨床心理士会と連携をとり、災害危機支援に関する研究者との意見交換を行う。

ウ 県民・市民に向けてこころのケアに対する意識を高める啓蒙活動

広報紙への投稿、健康講座などを行い、自分でできる健康管理や心身の健康に関するチェックポイントについてお知らせする。教育相談員や福祉関係者など、サポートをする側の人の二次被害を防ぐために、関係機関にパンフレットなどで注意を呼び掛ける。

3) 平常時におけるこころのケアに携わる人のコミュニティづくりと、災害危機時における拠点となる『埼玉こころのケアセンター』のマニュアルづくり

この事業は災害時を想定した研究である。よって確実に成果をもたらすものにするためには、今年度の成果とともに、次年度への継続した課題が生まれる。

①メンタルサポーターの養成、フォローアップ研修、事例検討、情報交換、地域別によるメンタルサポーターと災害危機支援アドバイザーとの連絡協議などは、今後も続けていく必要がある。

②連絡役を設けたり、会報を作成するなどして、災害危機支援に関する意識を高め、実際の災害時に機能するコミュニティとして、成熟させていく必要がある。

③実際の支援活動を具体的に検討した場合に、設置が必要となった『埼玉こころのケアセンター』のマニュアルづくりは、次年度の課題である。

平成23年3月11日（金）午後2時46分

東北太平洋沖大地震が起きました。

3月12日（土）午前9時00分

『埼玉こころのケアセンター』を設置しました。

①先遣隊の派遣

②足湯隊の派遣

③中長期のこころのケア

支援活動に向けて、検討を始めました。

研究・協議しながら、同時進行で実行することになりました。

【資料2】メンタルサポーター養成講座参加者アンケート

1 この講座に参加した動機はなんですか？

- ・災害時に在日外国人をヘルプする事等の勉強会をやっているの、もっと深く知りたくて。
- ・傾聴講座よりのお知らせで。
- ・傾聴ボランティアを始めたので、勉強したいと思って参加した。
- ・動機は母の療養と死に出会ったこと。母には何の介護もできなかったの、多少心残りがあり、何か人さまのお手伝いがしたいと思って参加させていただいた。
- ・案内をいただいたので。(複数)
- ・昨年10月頃、介護(福祉)の現場で6年間働いておりましたが、事業所が閉鎖になった為退職しました。いずれ、地域に貢献したいと考えておりましたので、参加させていただきました。
- ・傾聴を学んで、役立てたい。
- ・傾聴を学んでみたかったから。
- ・ほんの少しでも、お役に立てたらと思ひ。
- ・ボランティア活動に参加して、少しでも皆様のためになるように頑張りたい。
- ・日頃、傾聴ボランティアとして活動させていただいているのですが、災害時に地域でどう動けばいいのか、を具体的に勉強したいと思って参加しました。
- ・傾聴活動のためのスキルアップの一環として(複数)。
- ・災害時にできることがあれば、と思ひました。
- ・心のケアを学びたかったから。
- ・メンタルケアの学習により、社会貢献ができる機会があれば、と考えて。
- ・災害時に少しでもお役に立てたらと思ひて。
- ・川越で「傾聴ボランティア養成講座」を受講しました。その後、ホームページを拝見して、ちょうど都合のつく曜日だったので参加させていただきました。
- ・災害の時に、どの様にしたらよいか、など色々勉強したかった。
- ・現在、社協で傾聴ボランティアをしています。これからますます傾聴やメンタルサポートが必要になりつつあります。特に認知症の方々や在宅訪問で個人宅、1人暮らしの方へボランティア等に役立てることができたらと思ひ参加しました。
- ・傾聴ボランティアの仲間の紹介。
- ・私にもメンタルサポートができるかも、と思ひて。
- ・いざというときに、世のため人のためになるため。
- ・家族を亡くして、ひどく落ち込んでいました。「メンタル」と「傾聴」のボランティアとはどういうものなのだろう？と思ひて参加しました。
- ・地域に密着した活動を希望していたので、参加しました。
- ・講座の案内資料を送っていただき、参加しようと思ひた。
- ・時間ができたので、何か社会の中で役立つことがないかと考えました。

- ・自分に何か出来る事があるかと思い参加しました。
- ・自分の活動に役立つ事があるのではないかと思ったから。
- ・日頃のメンタル面でのスキルアップにつながるかも…と思い、参加しました。
(高齢者・障がい者への配慮が自然に身につけるスキル等と、自分自身のポジティブ意識の向上につながる考え方を学びたいと思いました。)
- ・何か研修をうけてみたかった。
- ・メンタルサポートに興味があった。
- ・メンタルサポートの講義があり、もっと学びたいと思いました。
- ・自然災害にあった二人の友人のために何もできなかったことを悔やんでいるため。
- ・高齢者が多い地域に住んでいて、見守り隊や健康体操などを行うにあたり、参考になる為の情報を知りたいと思いました。
- ・自分の普段の活動が自分よがりにならないように、時々フォローアップ講座を受けたいと思って。
- ・地域で何かボランティア活動を始めたいと考えていました。
- ・傾聴に興味があったので参加しました。
- ・スキルアップ。メンタルサポーターに興味がある。

2 この講座で学んだこと、気付いたことはなんですか？

- ・災害時のメンタルサポーターの活動意義の大切さを理解し、活動できればと思います。
- ・災害時に学んだことをいかせること。地域のマップなどを知ることができた。
- ・自分のストレスコントロールにも役立てたいと思いました。
- ・各地域で、ボランティア活動されておられる方々の話を聴かせていただき、学ばせて頂きました。先生の理解しやすい講義、また人間性が伝わり、大変よい講座でした。
- ・手助けは、個々に違うので、その人に合ったものを提供する。
- ・傾聴の難しさと、災害でのサポートは大切だと思いました。今後も学びたいと思います。障がい者への配慮など学びたかったので、嬉しく思います。
- ・もっと深く、時間をかけて学びたいと思いました。
- ・災害を受けて（自分も）本当に活動できるかと不安です。冷静に行動、思考を保てるかしらと思います。
- ・皆様の一所懸命な姿に触れて、私も頑張りたいと思いました。
- ・どんな支援をするにも、傾聴の基本が大切だと感じました。災害の防止、危機支援にチームワークの力が大切と思いました。
- ・災害時の地域社会との連繫を如何に築いていくか、自分の住んでいる地域との日常から繋がりをまず築く必要があると思いました。まずは自治会への関与を今まで以上に強めようかと考えています。
- ・災害危機時の自分の心理はどうか。他の人にまで気配りできるか。多分無理だろうということが分かりました。
- ・地域に根ざした活動の必要性。

- ・自分が平常心を持って接していきたいと思いました。
- ・いろいろと…災害時の心理について考えさせられた。
- ・ストレス・マネジメントの中のリラックス法がメンタルケアの中で重要な位置にあり、自身でも大いに学び、訓練の必要があると思いました。
- ・心理的なことの大切さ。クラス会で、座席を決めるのに誕生日順にして好評でした。皆でタッピングし、「気持ちよい」と喜んでいました。ありがとうございました。
- ・ひとりひとりが、周りの人たち、環境のつながりを意識することで、よりよい暮らしを築いていく必要を感じました。
- ・他人に、どのように接したらよいか、話の聴き方など色々勉強になりました。
- ・話し手1人に対し3人の聞き手で、話し手の思いをどう受け止めたか、というロールプレイの時、やはり話し手の心、意志のとらえ方等大変勉強になりました。
- ・共に支えあう大事さ。
- ・高齢者が多い埼玉県。自分は大丈夫、ではなく、普段（日々）の生活の中で人と繋がっていないと、支えてもらうことも支えることも難しいんだ、ということ。
- ・癒しとは、特別なことではなく、足を湯につけるなどちょっとしたことでいいんだ。
- ・日常的に行っている、よその方への思いやり。やさしい心がそのままこのボランティアの精神に繋がっていることを発見したことは、大きな成果でした。
- ・傾聴とは、話し手が満足するまで話を聞いてあげることだと思って参加したが、相手の求めていること、出来ること、を聴きとるのだとわかった。
- ・ポジティブとは、前向きに考えることだと思っていたが、今の自分の状況を見つめ、それをどう対処するか考えることだと教わり、気が楽になりました。
- ・災害時のボランティア。
- ・話を聴くということは簡単そうだが、難しいと思いました。
- ・人の相談や話を聴くことが多かったが、傾聴と共感の難しさを知りました。介護にも役立つと思った。
- ・日頃の傾聴ボランティアに通じる所が多々あるということ。
- ・思いやりと思いこみが違うということ。高齢者への傾聴の対応の仕方が参考になった。災害時の避難所での対応の仕方が勉強になった。
- ・傾聴（相手の求めていること・相手の出来ること）による正確な情報のとり方の大切さを感じました。また、災害時のストレスに対してのリラックス法等、とても勉強になりました。
- ・傾聴しているときには、自分を出すのではなく、女優になって演じることも大切なんだということ。
- ・災害時にどんなことができるのか。
- ・どのように活動をいかしたらよいか。
- ・相手が何を望んでいるかに気付くことが大切。
- ・無口な人に話させようと必死になり、多くの質問を投げかけるのは逆効果だと思いました。
- ・同感、同情ではなく、共感することのむずかしさ。日々家庭でも悩んでいます。
- ・思いやりと思いこみをはき違えないこと。避難場所や地域の人々のことなど、日常の情

報収集が大切。

- ・自分が、何かをしてあげたいという気持ちは大切ではあるが、もっと大事なものは、相手が何を求めているか知ることなのだという事。
- ・災害時の心理。ストレス・マネジメント。支えあう気持ち。

3 今後学んでみたいことはありますか？

- ・スキルアップ講座。
- ・深めていきたいです。
- ・介護、福祉関係では介護福祉士取得。産業カウンセラー取得。認知症ケアを学び、地域に役立てたらと考えています。
- ・カウンセリング。
- ・カウンセリングは、大学で学んで更に深めたいと思います。
- ・実践すること、と、心理学を学びたいと思います。
- ・再教育を受け、身につけていきたいと思います。
- ・音楽療法についての基礎を学んでみたいです。
- ・発達障害について。
- ・高齢者、障がい者への配慮を勉強したが、このことの更なる内容を勉強したい。
- ・災害時の状況をもう少し知らねばならないと思います。
- ・傾聴のスキルアップをしたいと思います。
- ・更に深く、いろいろな立場の人の心のケアを学びたい。
- ・実践活動の中で学んでいきたいと思います。
- ・埼玉カウンセリングセンターの「認定カウンセラー養成講座」を受講したいと思っています。
- ・メンタルサポーター、傾聴ボランティアを深めたいと思っています。
- ・リラクゼーションに興味を持ちました。
- ・傾聴をどの様にしたらよいか学びたいと思いました。
- ・傾聴の聴き手として、色々な場面での聴き手として、もう少し勉強したいと思います。
- ・メンタルサポートをもう少し学んでみたい。
- ・現在、がんセンターで見習いをしているが、技術に不安があるので引き続き、あるいはさらに傾聴などの臨床技術を学びたい。
- ・傾聴ボランティアを続けたいと思います。とても満足しています。
- ・カウンセリングとは。
- ・地域の防災・支えあいマップができれば素晴らしいと思う。
- ・社会福祉協議会主催の講座を受けていきたいと思っています。
- ・相手の心の中に入り込めるカウンセラー的な方面の分野に関心をもった。
- ・フォローアップ講座があったら定期的に参加してみたい。
- ・引き続き、このような講座があったら受けてみたいと思う。
- ・傾聴。

- ・もっと傾聴の仕方を学びたいです（身体で覚えるまで）。
- ・精神疾患をお持ちの方への傾聴。
- ・認知症の方との対話。相手が安心できる対応。
- ・「傾聴の応用」「ストレス・マネジメント」について学べる機会があれば学びたいです。
- ・介護ケア。

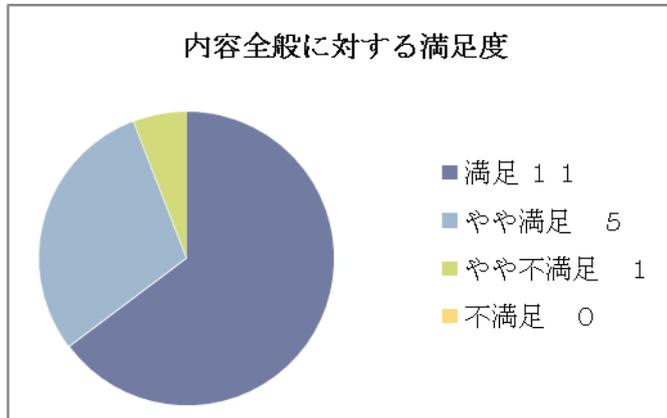
4 講座後の活動について（複数回答あり）

- ・すでに活動をしているグループに加わって活動したい。 18
- ・今回知り合ったメンバーでグループを組んで活動してみたい。 9
- ・個人的に社会福祉協議会などに出向いて、ボランティア活動できる情報を得たい。 9
- ・いずれ活動したいが、今は積極的に参加できない。 7
- ・特に考えていない。 1
- ・その他
 - ・機会があれば。 1
 - ・現在活動中。 2
 - ・まだ気持ちが固まっていない。 1
 - ・災害が発生し、時間に余裕があれば。 1
 - ・自分の地域で活動できるのか知りたい。 1

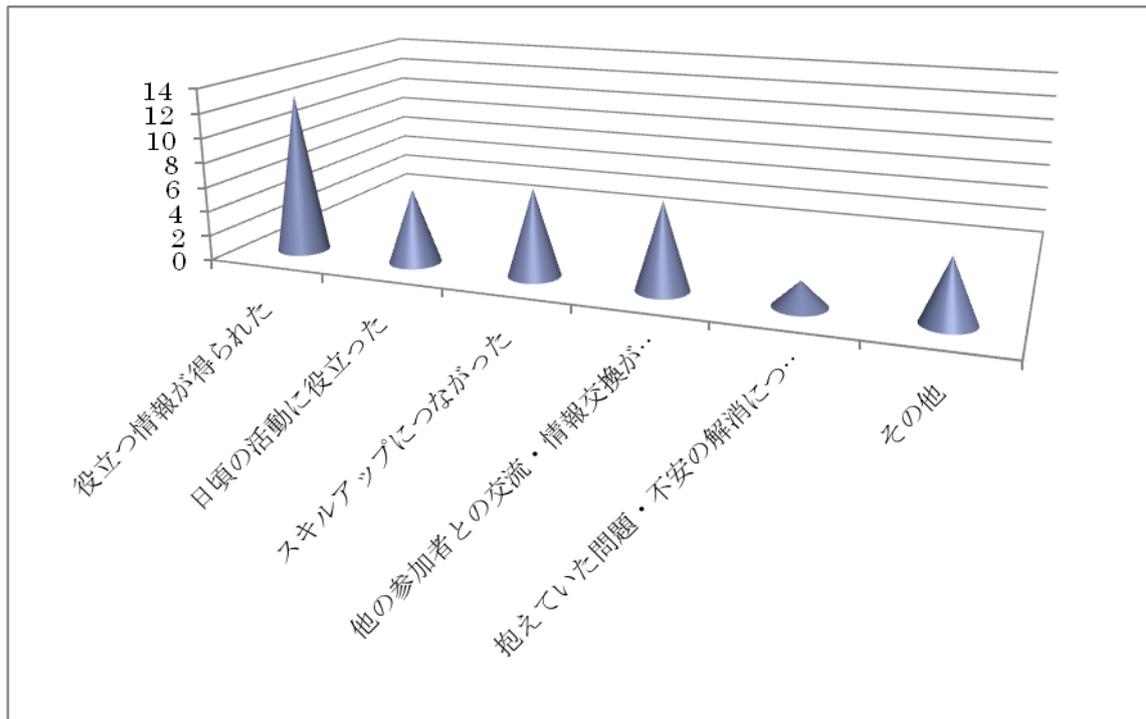
【資料3】各講座に対するアンケート集計結果

《メンタルサポーター養成講座（川越）》

1 今回のメンタルサポーター養成講座の内容全般について、ご満足いただけましたか？



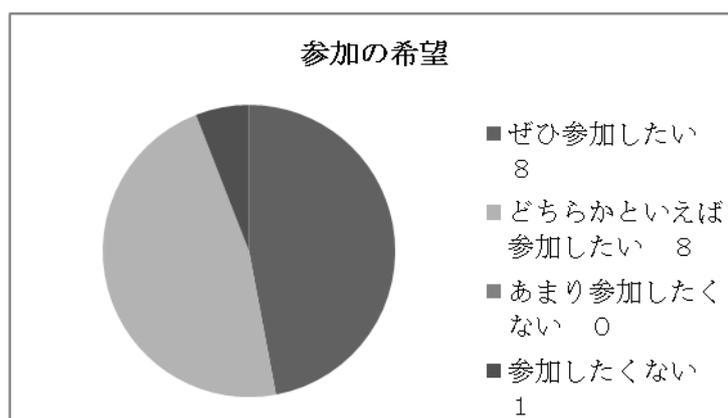
2 このメンタルサポーター養成講座に参加して、どのような点が良かったですか？



その他の意見

- ・ 足湯の実習、ストレス・マネジメントの理解。
- ・ 傾聴の意味がグループ研修によって体感できた。
- ・ リラックス法、足湯。なぜか幸せな気分でした。
- ・ 同じ志を持った方が多く、安心した。もっと社会にとけ込む努力をしなければと思った。
- ・ 先生の生き方、考え方を聴かせていただき、とても共感した。

3 今後このような、メンタルサポーター養成講座を実施する際には、参加したいと思えますか？

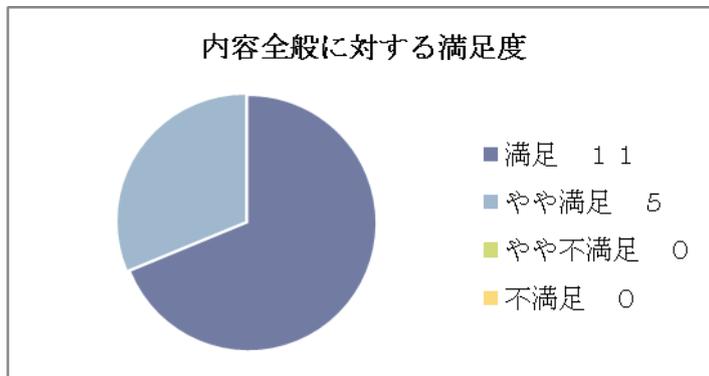


「参加したくない」と回答した人の理由

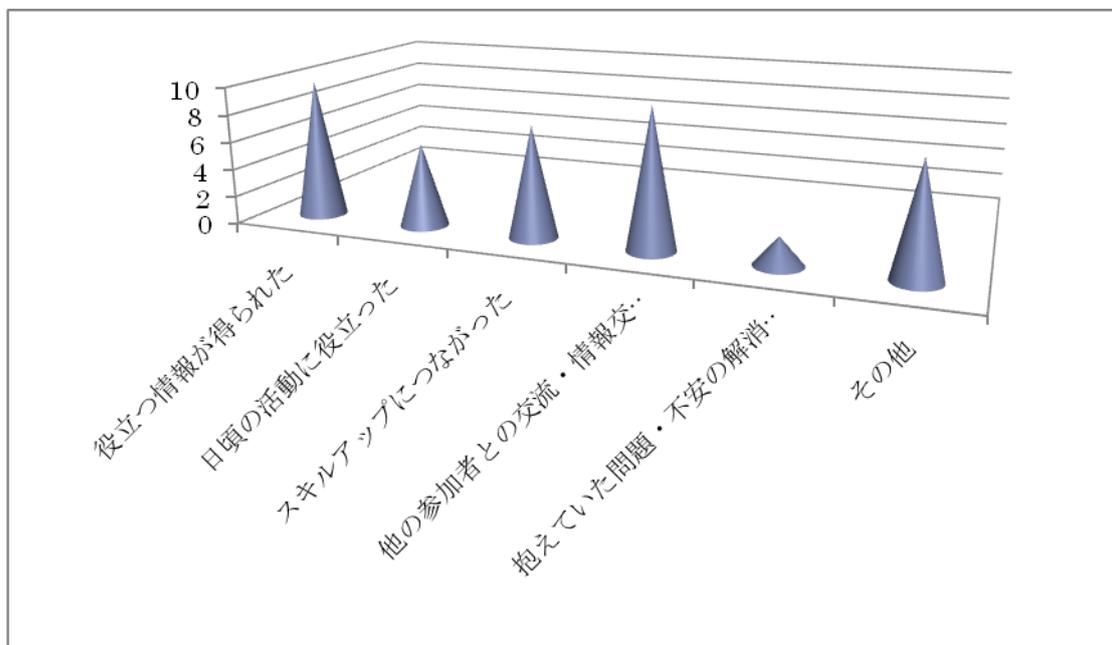
- ・今回は災害時サポートでしたが、自分はホスピス方面のケア、かつ傾聴をしたいので。

《フォローアップ研修会》

1 今回のフォローアップ研修会の内容全般について、ご満足いただけましたか？



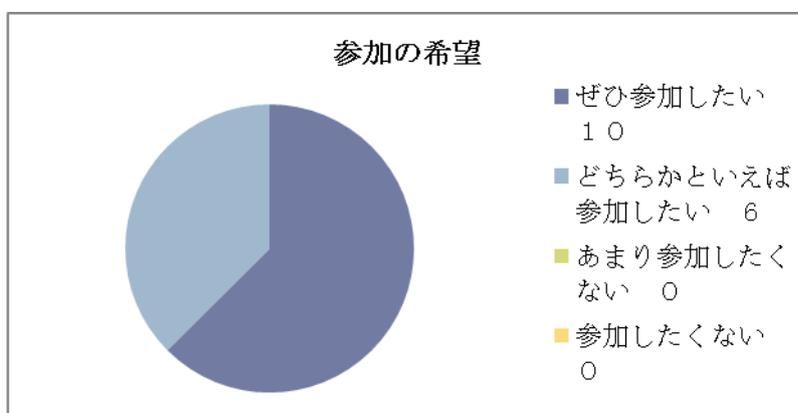
2 このフォローアップ研修会に参加して、どのような点が良かったですか？（複数回答）



その他の意見

- ・ 日常と違った別世界のような状態の中で、1人1人にどれだけ情報を分かりやすく伝えられるかが、どれほど大事なことが分かりました。
- ・ 日頃の見守り活動を行ったとき、情報の大切さや各個人の心が体の不自由をどう伝え援助できるか、私たちが考える支援の仕方、伝え方も勉強したいと思います。
- ・ ゲームそのものが「日頃の訓練」により対応できることと思います。
- ・ カードによるシミュレーションは大変勉強になりました。
- ・ 避難所運営ゲームをしていて、実際の危機に直面した時如何に情報を明確に知らせることが困難かを体験できた。このゲームを何回も行き、訓練する必要があると感じた。
- ・ 災害時の運営の難しさを体験することができた。
- ・ さいたまに住んでいると、危機感が足りないと実感しました。
- ・ 実際の災害時をシミュレーションできて、大変さを想像できたこと。

3 今後このようなフォローアップ研修会を実施する際には、参加したいと思いますか？



地域コミュニティによる災害時心のケア事業
災害危機支援研究委員

- ◎高倉 恵子 (特) 埼玉カウンセリングセンター代表理事
日本カウンセリング学会認定スーパーバイザー
- 浜野 聡 (特) 埼玉カウンセリングセンター理事
南部教育事務所スクールカウンセラー 臨床心理士
- 関口 幸男 (特) 埼玉カウンセリングセンター理事
東京国際大学講師 臨床心理士
- 菅原 秀美 (特) 埼玉カウンセリングセンター理事
スクールカウンセラー 臨床心理士
- 松浦 祐子 (特) 埼玉カウンセリングセンター理事
心療内科カウンセラー 臨床心理士
- 高倉 愛 (特) 埼玉カウンセリングセンター会員
カラーセラピスト
- ◎…委員長 ○…副委員長

<会場協力> 社会福祉法人さいたま市社会福祉協議会
社会福祉法人川越市社会福祉協議会

地域コミュニティによる災害時心のケア事業報告書

発行 平成23年3月
責任者 特定非営利活動法人埼玉カウンセリングセンター
〒330-0854
さいたま市大宮区桜木町4-780-7
TEL&FAX 048-650-6514
E-mail mail@npo-scc.jp